

白銀の山脈と富山湾に抱かれたキラリ輝くまち 《子どもも第一主義》で目指す持続可能な未来!

子どもたちにツケをまわさない政治

毎年発表される各種「住みよさランキング」には、賛否両論がある。「住みよさ」は客観的な数値(判定基準)による評価だけでは測れない。そこに暮らす人々の価値観(主観)が、多分に反映されるべきものだからだ。とはいえ、客観的な数値の比較がそのまま反映される《財政健全度》のランキングは、都市の掛け値ない現在の《実力》の一端が示されやすいこともあり、以前から行政関係者の関心は高かった。

今回訪問させていただいた滑川市も、各種「住みよさランキング」の上位に名を連ねる常連の都市だ。中でも最新の《東洋経済新報社・住みよさランキング2019》では、財政健全度の部門において前年から何と104市を抜き、792市中105位(富山県内1位)へジャンプアップするという注目の結果が示さ

れた。

「滑川市は近年、《東洋経済新報社・住みよさランキング》で毎年のように総合順位の上位(全国812市区中の10位台、30位台)に付しており、そのことへの手応えも、相応に感じてはいました。しかし、中でも《財政健全度》がこれだけ評価されたというのは、何よりもうれしいですね。私がそもそも最初に市長選に出た目的の一つも、実はそこにこそありましたから」

上田昌孝滑川市長(3期目)は笑顔でそう振り返りつつ、《市民が真ん中の市政》《子ども第一主義(子どもは未来、未来は子ども)》《子どもと子どもの親のための子ども第一主義》などの簡潔なフレーズが並ぶ、市政運営の心得を書いた紙をデスクに広げた。

「財政健全度の上昇が市長選(平成22年)に出馬する目的の一つであるのに対し《子ども第一主義》などの文言は、「財政健全化の進展と同時に進めるべき、市政運営の目標を端的

う え だ ま さ た か
上 田 昌 孝
滑 川 市 長

に表現したキャッチフレーズ(上田市長)なのだ。

「私が市長選への出馬を決意したのは、その前段の20年間にわたる市議時代に蓄積した数々の思い、自分が市長だったらこんなまちづくりをしていくのに——と考え続けてきたさまざまなことを、ぜひ実現したかったからなのです。そこで考えた最初の市長選のスローガンは《子どもにツケをまわさない》政治というものでした」





富山湾と山岳部に挟まれた滑川市には豊かな自然と伝統文化が同居

そう語る上田市長の《子どもにツケをまわさない》政治の要点は、市長就任の翌年に早くも制定された《滑川市健全な財政に関する条例》の存在が端的に示している。

「《滑川市健全な財政に関する条例》の制定は就任翌年の平成23年3月です。これは平成19年12月に多治見市さんが『財務状況の継続的改善を図るため、財務のルールを定めること』を目的に策定された先進事例に倣ったものです。

私が市長に就任した当時の滑川市は、財政が破たんに近い状態にありました。例えば、

実質公債費比率が市長就任直前の平成19年度には富山県内の10市中、最悪の23・1%に達し、必要な市民サービスもままならない状況でした。市長就任前の私は、市議会財政健全化対策特別委員会の長を務めていましたので、その状況を憂慮していました。

しかし当時の滑川市は、そんな状況を『特段の問題はない』としていました。私はこれを何とかしなければ、市民サービスに回すお金がなくなるどころか、今の子どもたちが大人になる頃にはより大きなツケが残されてしまうのではないかと。滑川市は昭和34年に財政再建団体になった経験がありますが、その再現もあり得るといって強い危機感を持ちました。それが市長選出馬への直接のきっかけになりました。

条例の制定から10年目を迎えた現在、滑川



富山湾の滑川市水域は特別天然記念物「ホタルイカ群遊海面」、漁期には見学用のクルーズ船も運航



鉛色の日本海は春の先触れ

市の実質公債費比率は8・6%（平成30年度決算に基づく昨秋発表の数値）にまで改善しています。全国平均（6・1%）からすれば、まだ改善の余地はありますが、住みよさランキングの財政健全度とその努力の過程が反映されつつある現状には、大きな喜びを感じています」（上田市長）

ちなみに地方公共団体金融機構が平成30年に公表した「地方公共団体における財政収支見通しの作成に関する調査研究報告書」では、全国の自治体のうち《健全な財政に関する条例》を早期に策定し、厳格なルールを定めた上で地道に実行している先進事例の一つとして、上田市長が「参考にさせていただいた」とする多治見市とともに、滑川市も研究対象になったことが明記されている。

財政健全化と並行する積極的な施設整備

『市役所は市内最大のサービス会社で、市長はシティマネジャー』『財政健全化とは、事業に使える金を生むこと』をモットーにする上田市長の財政健全化への道は、その過程で多くの市民サービス事業、施設整備事業なども並行して実践しているところに特徴がある。

『滑川市健全な財政に関する条例』制定以降、上下水道施設の拡充、『スポーツ・健康の森公園』（陸上競技場、ビオトープなど）の建設、市庁舎耐震補強工事、除雪車両の拡充、



神秘的なホタルイカの生態を展示する「ほたるいミュージアム」

学校施設への耐震補強工事やエアコン設置・プール整備、化学消防車両の購入、冬でも屋内で遊べる児童館建設（詳細後述）、全天候型屋内運動場『KENKODOME』建設など、毎年のように、必要と思われる施設整備を積極的に行ってきました。

それらは市債を財源にしているわけですが、市民が利用する施設整備には、市民協働の力を最大限に活用させていただき、経費を節減してまいりました。例えば『スポーツ・健康の森公園』の多目的芝生広場を造る際には850人の市民ボランティアが参加し、約1万㎡の芝生を何と30分間で植えました。同様に『スポーツ・健康の森公園』の植樹には



登録有形文化財の旧・造り酒屋「宮崎酒造」を活用したCAFE

300人、『堀江自然ふれあい広場』の植樹には200人の市民ボランティアが参加。苗木は市民や市内企業からの寄付を募るなど、スピード感を持って安上がりに完成させました。

その分、例えば陸上競技場のコースには、オリンピック級の材質を使うなど、使うべきところには本格的な整備をしています。財政健全化をきちんと進めながらも、やり方を工夫しさえすれば、その結果、このように市民に必要な施設整備なども並行して、積極的かつ本格的にできるのです」（上田市長）

滑川市ホームページには《借金時計》のバナーが貼られている。これをクリックすれ



滑川市最大のスポーツイベント・滑川ほたるいかマラソン(10月中旬)

ば、時々刻々と変化する滑川市の市債残高などの状況を確認することができると。財政状況をこのように常にガラス張りにするには、《滑川市健全な財政に関する条例》が旨とする健全な財政を構築し、維持・継続する上で不可欠な目標設定や達成度の可視化につながる。常時公開することで自らを常に律する(戒める)ための措置の一つにもなる。

さて、このような過程の中で誕生し、同時に上田市政のモットーである《子ども第一主義》を具現化したシンボリックな施設としても位置付けられる《児童館》を、まずは訪問させていただいた。

児童館はシンブルな名称からは想像しにくいですが、平成28年4月の開館から3年半弱で、来館者が20万人を超えたという超人気施設だ。従来の児童館のイメージとは懸け離れ、季節を問わずに親子連れや、高校生までの幅広い年代の子どもたちが共に楽しめる屋内の《遊び場》だ。そのモデルにしたのが、あの東根市の人気施設《遊びセンター・けやきホール》(本欄平成23年11月号にて既報)だということから、盛況なのも大いに納得できた。

「私は市議時代の20年間と市長になってからの10年間を合わせた計30年間、全国各地のさまざまな先進事例を視察してまいりました。東根市さんの《遊びセンター・けやきホール》は市議時代に訪問させていただき、特に強い感銘を受けた施設の一つでした。ご承知のように冬の長い東北の子どもたちが、冬でも元気に遊べるような施設をとということから、現在6期目を迎えられる土田正剛市長が平成17年に完成させた施設です。地元山形県内はもとより、宮城県や秋田県などからも大勢の親子連れが遊びに来ています。

1F～3Fまでの吹き抜けで、ど真ん中に大木のような大型滑り台が据えられている《遊びセンター・けやきホール》には、スケールの点では到底及びません。しかし、滑川市の児童館も《遊びセンター・けやきホール》のいいところ取りをしながら、随所に新たな工夫も加えて、おかげさまで滑川市の子どもたちや親御さんだけでなく、近隣の市町村からの



姉妹都市シャンバーグ市の事例をモデルにした子ども図書館

来訪者が絶えない人気施設になっています」(上田市長)

**子ども第一主義の象徴
《児童館》《子ども図書館》**

取材当日(1月30日)の滑川市は、暖冬とはいえ、朝から冷たい雨が強く降るあいにくの天候だった。平日の早い午後ということもあり、児童館には利用者の姿はまだほとんど見られなかった。しかし、これが週末であれば、車で駆け付ける家族連れや、雨をものともせず詰り掛ける元気な子どもたちで、さぞか



大人気の児童館にある「あそびのホール」

しにぎわうだろうことが容易に想像できる、実に楽しい施設だった。

入り口を入ってすぐの「あそびのホール」は、板張りで天井の高い空間が気持ちよく、真ん中に設置された、子どもたちが乗って遊べる大きな飛行機の遊具(きらりん飛行機)が目を引く。また1F～2Fの吹き抜け空間に設置された屋内型アスレチックは、子どもたちにとりまわりの遊具だ。大人も使用可能で、途中には天井裏のような狭い空間がある。大人も子どももつい寝転がりたくなるだろう。

こうした遊具の集中したホール内には、秋



アスレチックは大人も使用可能(児童館)

田県「かまくら」をイメージした形の多目的小部屋が三つ、調理や茶道などの実習もできる多目的室が二つ、読書やPC操作ができる「読書・PC室」もある。さらに建物の隣接部には「運動室」があり、卓球やバスケットボールなど、年長の子どもたちも楽しめる空間になっている。

「さらに野外には市内のお父さんたちの有志が作ってくれたピザ窯もあって、天気の良い日には屋内外の施設を使った、さまざまなイベントが常時開催されています。またこの春には庭に新しいアスレチックの遊具も完成する予定で、子どもたちは今か今かとその完成を待っているようです(笑)」(上田市長)

ここで驚かされるのは、東根市への再視察をはじめ、建物全体の企画や土地の買収、完成後の運営なども全て同じ女性職員が行ったという事実だ。その職員こそ、かつて教育委

員会子ども課の課長で児童館を担当し、現在は児童館長を務める砂田志賀子さんだ。砂田さんは「ウチは全て市長のリーダーシップの下、否も応もないのです」と笑う。市長のリーダーシップを、職員がしっかりと支える体制が構築されているのだ。

ちなみに砂田館長がかつてプロジェクトチームの一員であった《子ども図書館》も、滑川市の《子ども第一主義》のシンボリックな施設だ。

「《子ども図書館》は《児童館》が完成する1年前、平成27年3月にオープンしました。滑川市は平成9年7月に米イリノイ州シャンバーグ市と姉妹都市提携を結んでいます。シャンバーグ市には世界的に知られた、素晴らしい子ども図書館があります。滑川市の《子ども図書館》はそれを参考に企画した施設です。単に本をたくさんそろえるだけではなく、子どもたちに読書の楽しみ、学習することの楽しさを知ってもらうためのさまざまな工夫を凝らすとともに、子育て支援の機能なども付加しています」(上田市長)

地場産業振興、子ども第一主義のさらなる展開

子育てに資する施設の拡充だけでなく、子育て支援策も手厚い。具体的には、国に先駆

滑川市

市 政 ル ボ

(富山県)



海洋深層水から天日塩を抽出する製塩場

けて平成28年度から実施した第2子以降の保育料などの無償化、所得制限なしでの中学生までの医療費無償化（令和2年度からは高校生まで拡大）、小中学校の普通教室のエアコン設置率100%、食育事業推進の一環として学校給食への地場産食材の使用割合県内1位を実現（※滑川市学校給食共同調理場は、令和元年に「地産地消等優良活動表彰」で文部科学大臣賞を全国で唯一受賞したほか、富山県の地産地消メニューコンテストで最優秀賞を複数回受賞）など、実に多彩だ。さらに昨年4月には、妊娠・出産・育児の切れ目ない相談・支援を行う《子ども未来サポートセン

ター》もスタートするなど、滑川市の子育て支援はさらに拡充の度を増している。

教育支援策においても、全小学校へのタブレット整備、英語教育でのALTT4名体制実施などを図り、「全国学力・学習状況調査」では小・中学生ともに全教科で全国平均・県平均を上回ったという。

また、地場産業の振興という意味では、富山湾の海洋深層水を活用した各種の取り組みが注目される。

「滑川市は財政再建団体時代に、低開発地域工業開発促進法の指定地となって工業集積が進み、近代的なものがづくりの素地ができました。現在も人口一人当たりの製造品出荷額は県内トップで、ものづくりの伝統が息づいています。今後はその技術力を生かし、定評ある富山湾の海洋深層水を活用した各種の事業も推進していきたいと考えています。現時点で特に期待するのは海洋深層水トマトです。市内の農業法人が海洋深層水を使って栽培し、市場にも出回り始めています。また滑川市では海洋深層水から天日塩を製造する施設を造り、『健好の塩』として製造販売を開始しています。海洋深層水トマトとともに、ぜひブランド化していきたいですね」と期待を込める。

以上、駆け足でご紹介してきたように、滑川市は現在、財政健全化が軌道に乗り、並行する形で展開されてきた各種の活性化事業・施策が花開き始めている。全国の都市と同



北国街道に面する漁場・滑川は大正・昭和初期に大いに繁栄（登録有形文化財・廣野家住宅、大正3年築）

様、滑川市も平成16年をピーク（3万4千人強）に人口減少に転じているが、総務省の人口移動報告における滑川市の転入者から転出者を差し引いた社会増減は、4年連続で社会増となっており、上田市長は「このところ3万3千人台で安定しており、多少の上下はあっても、そのレベルで下げ止まり傾向になりつつある気配を感じている」とも語る。

人口の増減が今後どのように推移していくのか？明確な予測はできないにしても、滑川市には子育て世代を受け入れる環境が整っている。《子ども第一主義》のさらなる展開と実際に、期待したい。

（取材・文：遠藤隆／取材日令和2年1月30日）